

8月の末頃、福島君から「小野先生と歩く会」への参加を呼びかけられた。集まりの名前が付いた事は知らなかった。それも嫌な名前を付けたものだ。

早速参加の意向を伝えて置いた。所が、二人住まいの我が家のパートナーがこの週の初めにギックリゴシになってしまった。実は我がパートナーはこの春から思わぬ体調の乱れに遭遇し、落ち込んでいたのだ。何かの祟りではないかという意見も聞こえ初めていた時期であった。

一旦は不参加の意向を王鮭のご主人に伝えた。だが、結局は何時でも電話での呼び戻しに応じる事が出来る態勢を作って参加を強行する事にしてしまった。私が採用した「態勢」というのは、王鮭まで自分の車で行く、ということだけであったが。ところで、King Salmon というのは「王鮭」に名を借りた「大酒（飲み）」のことだろうと思っていたのだが、何故かこの頃「王鮭」という表現が時々使われるようだ。私もそれに倣(ナラ)おうと思う。

10月22日（金）

王鮭に4時頃到着。毎回王鮭主人夫婦に暖かく声を掛けて貰えて嬉しくなる。私が到着第一号だと思っていたら、奥から小野彪君が出てきて挨拶をされて驚いた。名前の「彪」は何と読むのか知らないまま今日まで来てしまった。虎の皮の美しい文様からこの字はアヤと読むそうだが、今日行き会った彼は昔よりも更にアヤという感じからは遠ざかって「タケ」に近い偉丈夫になっていた。彼は今回の会に合わせて泊まり込みで王鮭の仕事をしているそうだ。

驚いたのは、王鮭主人によって明日歩くコースの地図と日程表がキチンと印刷されていた事である。その日程表によるとこの「歩く会」は既に13回目だそうである。その13回歩いたうちで日程表が示された事があっただろうか。ましてやコースタイム付きの地図まで用意されているとは！

どうやらことの真相は厨房を手伝ってくださるおばさんにあるようである。おばさんは麓の武石村の山岳会に所属しているのかも知れない。何日か前に、おばさんが焼山沢を歩いたらしい。その話を聞いて「ヨシ！！そんな良い所なら我々も行ってみよう！」ということになったのかな？おばさんから提供された資料が武石山岳会作成の登山路の見取り図であり、お聞きした話がしっかりした日

程表になったのかもしれない。

明日一緒に歩くのは、昔の山岳部員が西村清亮・百瀬晃・福島資剛・鈴木一と私。このうち鈴木君だけがグット若くて50歳代前半。その他福島君などと同期の亀井弘江・降旗壮哉・藤崎晃夫妻。加えて福島の友人で近所にお住まいの中井新平さん。総勢10名の大集団。藤崎夫妻は明朝、現地で合流予定。藤松勇郎君は明日の夜の会に参加とのこと。

夕刻6時頃には宴席が始まる。福島君が話し出した。「鈴木君は若いし、百瀬はテニスで鍛えているし」とここまでは登山の足の強さの話である。ついでに「西村は口が……」といいかけたが、小野君の大声に遮られてしまった。福島君だけではない。今夜ばかりはさすがの西村君も、大声の小野君に話の腰を折られる事がしばしばである。

亀井さんは東京の小学校で美術の先生をしていたそうだ。聞いてみると山の会に属して沢山の山に登っている。残雪期にも槍ヶ岳まで足を伸ばしているらしい。山の訓練は充分してあるらしい。随分前からの王鮭の常連らしい。

降旗壮哉君も若いときから少しずつ歩いているという。美ヶ原のTV塔の近くにホテル＝高原荘がある。高原荘が積雪期にも車を出して松本から客を運び揚げてくれる。そして雪の台地を雪上車で回って楽しませてくれるらしい。そんな企画にも時々ご夫婦で参加しているという。

私は9時頃には部屋に引き揚げたが、元気な連中も12時前には切り揚げたようだ。何しろ計画書には明日朝6:00出発となっている。5時にはベッドをはなれなければいけないだろう。

10月23日(土)

私は5時にホールに出ていったがすでに全員が揃っていた。出発が1時間は遅れるだろうと思っていたが時間正確に事が運んでいる。立派な計画書の効果だろうか？

6:10頃出発。4℃位か。この時期としては暖かい。

車は一旦和田村役場まで下りて美ヶ原に登り直す。使っている車の半分を山本小屋の駐車場に置き、残った半分の車で武石村の巣栗集落の観光センター迄下りる計画である。

山本小屋駐車場には15台ほどの車が停まっている。ここから南西に八ヶ岳が

見える。八ヶ岳の手前が雲海になっている。その雲の海の中に小島になった車山の山塊が浮かんでいる。雲海の向こう岸には蓼科山が八ヶ岳を従えている。その右には富士山がスッキリと見える。塩尻峠から見慣れている富士山より大きく見えるのは何故だろう。雲海を見ただけでもここまで上がってきた価値があったというものである。福島君が、巣栗の観光センターで落ち合う事になっている藤崎夫妻がここに居ないのを残念がって、「この雲海を藤崎に見せたかったなあ」と、これはマア巨漢の福島君に似合わないホロリとするようなお優しい事をおっしゃる。

観光センターに向かって下る。しばらく下ると白樺の美しい原があった。有名な観光スポット白樺平だそうだ。

1,200mHにある観光センターまで一気に下る。広い駐車場を持ち、沢山の売店がある。広場の片隅にある数株のドウダンツツジが真っ赤に色づいている。予定の8時丁度に藤崎夫妻が到着。横浜から時間正確に着くというのはどうゆう技術だろう。夜中の何時に家を出たのだろうか？長旅の疲れを見せないのは若さ故か。

1kmほど62号線を上流に登って登山口に着く。3台程車を停める事が出来るスペースがある。ここからいよいよ山登りが始まる。

今日のコースは美ヶ原に登る三つの古い道の内の一つだという。特に佐久側から登る道はこれ一つだけであつたらしい。美ヶ原開発には西村君のお父さんが深く関わっていたという話は何度か聞いた事がある。古い道だけに落ち着いた良い谷である。南側から登る「百曲がり」の急斜面とは比較にならない。地元の山岳会が手入れをして道標なども整備してくれている。もっともっと利用されて然るべきコースである。

綺麗な水が流れている。焼山沢である。百メートルほどの間、沢に添って車が入れる作業道が付いている。どんなペースでも登れそうなツワモノが多いようだが年寄りも居る事だ、先頭を歩く西村君に声を掛けてゆっくり歩いて貰う。

森林帯である。熊に注意の看板が出ている。福島君が鈴を沢山用意してくれていた。10人もの集団がガヤガヤ話ながら歩いていれば熊も敬遠するだろうとは思いますが、福島君鈴だけでなく運動会で使うホイッスルも使って鋭い音を響かせて熊に警告を発してくれる。丸太橋を渡って左岸を上る。九十九折(ツヅラオリ)の坂道をうねうねと上ると沢の水音が遠くなる。山肌を巻いて真っ直ぐに進むとまた水の音が近づいてくる。雑木がやがて樺やサワラが混じるようになる。大分

登った所で「トガ親木」と看板が出ていた。トガというのはツガ＝樺のことだろうと思ったが武石山岳会作成のパンフではイチイの大木だとしてある。前方に滝が見えてきた。焼山滝である。道は滝の手前を高巻き気味に上がっている。滝の全容を見ようと数歩沢沿いに登ったら右手から白糸の滝風の幅が広い静かな水流が落ちていた。これが雌滝、正面が雄滝だと言う。更に大きな岩を越えて近づいてみたら、雄滝の上に細いがしっかりとした滝があった。いい雰囲気滝である。

雌滝の上を高巻く。「鬼ヶ城」の看板がある。樹間に岩峰が見えると言うが私には分からなかった。奇岩が連なっているのだったら確認したかった。「鬼の城」というのは岡山県総社市辺りの山の中に、岩を積み上げた規模の大きなものがあると聞いている。鬼の城は神籠石(コウゴイシ)と呼ばれている場合もあるそうだ。日本に移住していた朝鮮の人達が白村江以後の大陸との緊張関係を背景に当時の最高の技術を駆使して作ったものであるそうだが、奈良以西にしかないはず。勿論九州が鬼の城分布の本場である。焼山沢のものは恐らく自然の岩だろう。でなければ祭事の為の遺跡かも。

道の右手に岩屑が積み重なってキツネが身を潜める事が出来そうな洞窟が幾つかある。その一つにヒカリゴケが黄緑色に光っていた。天然記念物になっているらしい。伊那の光前寺の庭にもあるがここの方が元気も良く立派に見えた。

福島君が時々ホイッスルを鳴らしてくれる。森林帯が続いて熊が何時顔を出してもおかしくない雰囲気の道である。木が生い茂っていて、沢の水が流れている。十分な湿気があるから立派な苔が登山道まで覆い尽くしている。5cm ほど伸びている苔もある。崩落して荒れている箇所もないわけではない。だが全体は沢も含めて落ち着いている。小さな滝が苔の中を流れ落ちている。登り口から頂上までの水平距離が非常に長い。地図上で百曲がりの道と較べてみるが良い。この道なら真夏に重い荷を背負っても登る気になるだろう。もっと宣伝しても良い道であろう。

そんな歩きやすい道でも年寄りには疲れてくる。朝飯は5時半であった。腹も減ってくる。だが先頭の西村君はなかなか休んでくれない。苔が生えていて腰を下ろせば尻が濡れるだろう。陽が当たる乾いた所まで頑張ろう、というのが西村君の考えらしい。1,800mH 位までは登ってきている。道脇の草にも今朝の霜が白く残っている所もある。腰を下ろすには不向きな所が多いが、腹が減っては戦にならぬ。ようやく少し陽の当たる所を見つけて昼飯にする。10人ものオニギリを

用意するのは大変な事だろう。近頃食欲不振の私が用意して頂いたものを食べる事が出来たのは、素晴らしい同行者達の存在の故だろうか。

休んだ所に「水石」という意味不明の看板が掛けてあった。藪をかき分けるようにして覗いてその意味がはっきりした。大きな石の上部が洗面器風に窪んで、水が溜まっているのだ。水溜まりの上には別の岩が差掛けを作って洗面器の水を保護している。然しどれほど喉が渴いていてもこの水を飲むには勇気が要るだろう。洗面器の底には泥や落ち葉が見える。ミミズがいそうである。洗面器の縁(フチ)には、ここにも当然立派な苔が生長している。この水石に較べれば昔(55年程の!)、読売新道の赤牛岳から水晶岳までの稜線に出合った水石は凄く立派であり、山岳部員一同の渴きを十分に満たしてくれた。その日は真夏の炎天下を朝から歩き詰めであった。喉はカラカラになっていた。その時水石を発見したのだ。構造はここ焼山沢のものと同じであった。だが石は綺麗な花崗岩。水は綺麗で底に溜まっている数個の小石がシッカリ見えた。全員が喉を潤し、尚かつ水筒に入れる事が出来た。恐らく窪みの製作者は風であろう。小さな窪みに落ち込んだ小石が強い風で窪みの中を行ったり来たりしている間に窪みを少しずつ大きくしてきたのだろう。勿論雨の後暫くすれば窪みの水は干上がってしまうだろうが、神様に導かれている我々は、絶妙な瞬間に「水石」を発見したということだろう。あれから55年。あの窪みは今も小石に削られてホンの1mmの十分の一くらい大きくなって水を貯めているだろう。

元気を取り戻して頂上を目指す。歩き出したらすぐ前の方が明るくなってきた。急に視界が開けて放牧の為の柵が見えてきた。美ヶ原高原に到着である。ここで中年のご夫婦に出会った。焼山沢で初めての出会いである。

木柵沿いに歩けば自然に遊歩道にでられるのに、皆さん拘束されるのがお嫌い、自由が好き。勝手に牧場の中を歩いてしまった。植松君に見つかればなんと言っただけで叱られる事か。柵のこちら側は牛の糞が乾いていた。向こう側には昨日生成されたようなのがアチコチに散在。恐らく牧草保全の為に1年置きに放牧エリアを換えているのだろう。

今日は土曜日。遊歩道には若いカップルや私より年寄りの方までが無風快晴の美ヶ原を楽しんでいた。

塔の裏側の歩道を少しはいると檜ヶ岳が見える。西村君自慢の?スポット。塔の広場で藤崎君が紅茶を淹れてくれた。ストーブと一緒に大量の水を背負い上げ

てくれたのだ。ありがとう。降旗君とは山本小屋で別れる。

山本小屋から車で今朝の道を下る。白樺平には大勢の観光客や写真屋がひしめき合っていた。帰りに152号線沿いの道の駅に併設された温泉に入る。立派な施設である。(この施設は私の家の'97年刊の地図には載っていないで、'00年のそれに「マルメロの駅ながと」とある場所に出来た施設かも?)

4時から今日の山登りの成功を祝して大宴会。新たに藤松君が加わってまた一段と賑やかになった。厨房を守ってくださる方には大きな迷惑だろうが高校時代の同級生が集まるところになってしまうものらしい。

宴席から早く引き上げて寝ていた私がそろそろ起き出そうかと思う頃にもホールではまだ話し声が聞こえていた。

10月24日(日)

夕べ遅くまで(今朝早くまで)話し込んでいた連中も皆元気に顔を揃えた。食後、藤崎君は頭に鉢巻き、腰に魚籠(ビク茸籠?)の素敵な(!)カッコウで、勇躍してキノコ採りに出掛けていった。

私は10時頃王鮭を辞去した。

## ウシッカワについて

宴席で話題になったウシッカワ。調べてみたら間違っただけを話してしまったかも知れないと思うようになった。そこで権威ある書から引用。

**牧野植物図鑑**：クロカワ（ロウジ） [はりたけ科]

秋季、山野に生える。傘の大きさは6～15cm。傘の周辺は下に巻き、全体の形は不整。傘の表面は黒いが肉は白色。裏面は白く、細孔が密生。柄は短く表面はいくらか黒みを帯びる。食用とされているが少し苦みがあるので、普通は大根おろしと共に食べる。

**信州きのこ百科**：クロカワ [いぼたけ科] 地方名 ウシビテ・ロウジ・ウシビタイ

発生：9月中旬～10月中旬 松林の地上に群生する。

形態：カサは径5～20cm 扁平丸山形から中央が低めの扁平に開く。表面はネズミ色から黒みを増し、肉は厚く充実。下面は平滑に近く、白色からネズミ色。時に赤紫がかかる。茎は長さ3～8cm、径1～3cm。内部は固く充実。胞子紋は白色。

メモ：多少苦みがあるが人気のあるキノコ。強火で焼いたりゆでこぼして苦みをとる。水で煮てそのまま壺に入れて保存すると長持ちする。冷蔵庫に長い間入れておくと細菌が繁殖して食中毒を起こす恐れがある。

**馬瀬良雄** 新聞連載記事から 長野県内での方言

正式名はイボタケ科クロカワ。

◎松本・塩尻・安曇・諏訪・上伊那・東信：ウシビタイ・ウシビテ・ウシブテ。牛の額に見立てた名。信州独自の方言。

◎木曾：ロウジ 大町白馬：ロウジン。傘の表面の皺を老人（ロウジン）に見立てたという。

◎ウシ（ッ）カワ はウシビタイとクロカワの混交。

◎上伊那南部・下伊那：オショウニン 日蓮上人が初めて食し（て見せ）た茸。

◎全国規模で調べると カラス・クロキノコ・クロタケ・ナベカブリなど。

<< ロウジ・ロウジン は 老人（ロウジン）の皺 に見立てたと言うが俄には信じられない。老人などと言う漢語を田舎の人が使っている情景は考えられないと思うが？>>